



佛法 世帯

渡世身持談義 二

叢書  
共五

滿口氏藏書印

13  
652  
2



通門  
卷二

東方  
庫

第一

渡世身持談義

二之卷目録

天秤と丁銀寺和尚高口より  
新金を吹か、堂の裏にあり

明治三六年  
九月十一日  
購

等用たうに暇くと登る揚屋おれお渡子

は暇に

揚屋積つて邪淫の悪鬼と  
成る身の身を成るの自業  
自得果あつら成るを  
教化と

今別々

才二 夜籠のも懸へ身の怨と成る分判

けねい

人月一は信ひへさへ法務負ふと  
去りて七念もあや去此不  
まきの賊鬼乃と法経いふくも

才三 結細の栲代おて仕おて仲人の宵の程

けねい

唯心の強歌いそを換と招く大  
歌と舞うれば御よあふれとる格の  
乃を後て一切の歌人は雨と

後世身持候義二之巻

一 毎用なりけねいと登り揚屋の糸階子

天秤の丁銀ちの長老けり結末と人の促はの中徳の  
寄れ守とさうのい見あふほがあれはて毎角をみよを  
ひらげくやうとさうい。世帯と持あり。結末のふ生  
けふふけの神り候義と後世の妨を扱んとけふ  
入のぞい狐脚の候義と後世の妨を扱んとけふ  
君候りりく方候ふ狐りりくけんと。則ち入の小判  
お場のさう度へ上り。もうけ溜のうの打さしていつ。む結末の世  
帯れ肝をといやあう。結末りりまてももけるるをさうねい  
業と候て不忠生とするかおと。ざんかう結末してし候  
たらまねぬ。結末は情を知て候るる。と結末の上の扱











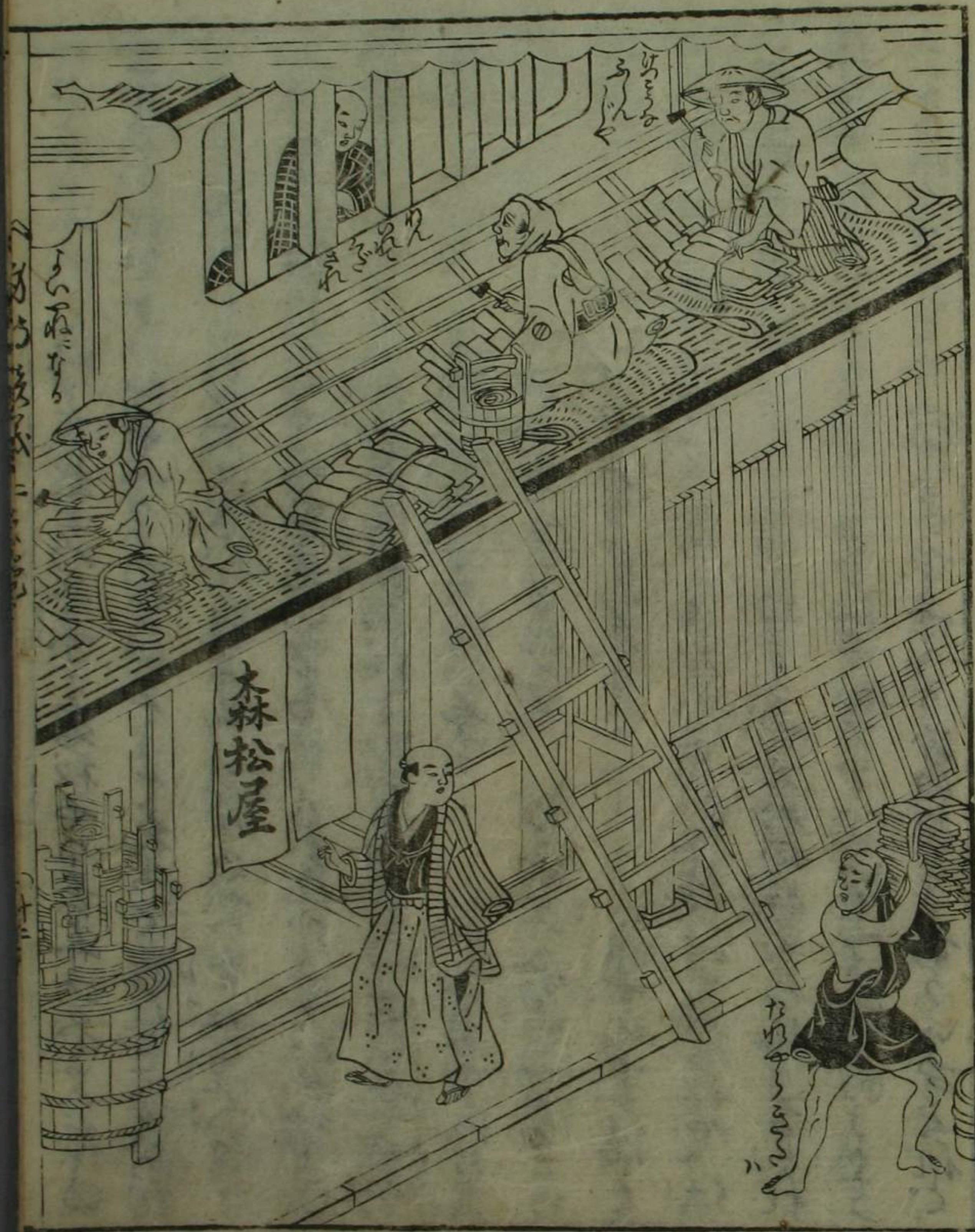




















舎下より埒のわづらひのりもめてはなほいんかうあつねお  
あやせぬけりけり埒まゝとぬのぞりぞうくたあまぬたのり  
楯とぬまゝとてごすおのぬいごすあまふりゆぬた費とぬのり  
のぬまゝとぬあて。そぬた人よ換とけまいてさ人のぬいぬ  
とつらぬいぬいぬをたぬとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

後世何持候義こゝろを

